



家畜の中毒に注意！

近年、濃厚飼料の高騰等により、家畜の生産現場では厳しい状況が続いています、牛の肥育経営では、如何にコストを抑えるかが“カギ”です。また繁殖経営においても良好な自給飼料を確保し、経営の安定化が求められています。

そこで今回、放牧や舎飼いで給与される飼料における主な中毒原因物質を紹介します。

中毒原因物質は現代の畜産経営において、ひとたび飼料に紛れ込むと一度に多数の家畜に被害を引き起こす危険があります。

主に放牧での中毒

原因1：有毒物質

植物(樹木、草等)が持つ有毒物質を摂取することにより、起こる中毒

キョウチクトウ

葉は竹、花は桃に似ていることからこの名が付けられました。日本全土に分布し、摂取すれば痲痺、下痢、頻脈、急死します。



センダン

日本では牛舎の日陰樹として多く利用されていますが、除虫剤の原料としても用いられています。



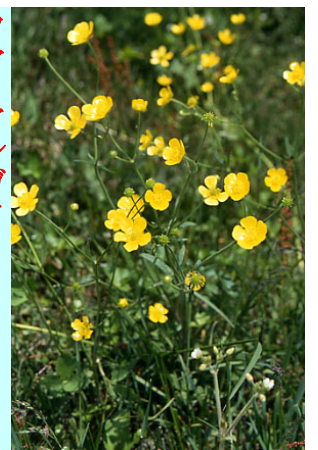
オナモミ

メキシコ原産の帰化植物で、日本各地に自生しています。実を摂取することで痲痺などの中毒症状を起し死亡します



キンポウゲで呼ばれ、日本全国に分布、刺激成分があり、中毒を起せば胃腸炎、下痢、嘔吐を招き、重傷の場合は死亡します。

ウマノアシガタ



その他、ユズリハ、アセビ、スズラン、ワラビ、スギナなど多くの植物があります。

主に舎飼いでの中毒

原因2：菌が出す毒素（マイコトキシン中毒）&（エンドファイト中毒）

飼料中の赤カビ、青カビ、コウジカビなどが産生する毒素を摂取することで起こる中毒。

マイコトキシン（mycotoxin）とは・・・

“myco-”「菌の」、「toxin」「毒」という意味があります。

現在 100 種類以上のマイコトキシンが報告されていて、**アスペルギルス**（コウジカビ）、**ペニシリウム**（青カビ）、**フザリウム**（赤カビ）等の菌がほとんどです

主な毒素

アフラトキシン

アスペルギルス菌が出す毒素で、ピーナツやトウモロコシなどを汚染し産生されることが多く、肝臓が障害を受けると食欲の低下や、乳用牛では泌乳量の低下が見られます。天然の物質として現在知られている中で最も発ガン性が高いことから、全ての食品に基準値が設けられています。

パツリン

ペニシリウムまたはアスペルギルス菌が出す毒素で、腐ったリンゴ、モモ、ブドウなど果実の表面に付着し汚染する。ヨーロッパで問題になっていて、サイレージのパツリン汚染があり、牛での中毒例は少ないが、チアノーゼや痙攣を起こします。

トリコテセン

フザリウム菌が出す毒素で、豚が最も感受性が高く、食欲減退、嘔吐、胃炎、皮膚炎などを起こします。

ゼアラレノン

フザリウム菌が出す毒素で、内分泌攪乱物質で、家畜に不妊、流産、外陰部肥大などを起こします。

エンドファイト（内生菌）とは・・・

植物体内で生存し、植物体から栄養をもらい、耐虫性を付与して共生関係にある菌で、イネ科に多くみられます。海外の西洋芝（イタリアンライグラスなど）でエンドファイト感染が広く行われていて、副産物のストローを家畜に与えることで中毒を起こします。

主な毒素

ロリトレム

ペレニアルライグラスに感染するエンドファイトが産生する毒素で、“ライグラススタッガー”と呼ばれる筋肉の痙攣、頭の上下運動、ふらつきなどの症状を起こします。

エルゴバリン

トールフェスクに感染するエンドファイトが産生する毒素で、血管の平滑筋収縮により循環障害を起こし、四肢や尾の壊疽を起こす。乳用牛の“サマーシンドローム”と呼ばれる泌乳量の低下、体温呼吸数の増加、受胎成績の悪化はトールフェスクに感染したエンドファイト中毒である。また肉用牛での冬場に見られる耳や尾、蹄に壊疽を引き起こすものをフェスクフットと呼ばれます。

その他の中毒

- ・ **無機物**（銅や鉛中毒など）・ **殺虫剤**（有機リン剤、ピレスロイド剤など）・ **殺鼠剤**（クマリン剤など）**その他**（硝酸塩中毒など）があります。

中毒を疑う症状を発見したら、かかりつけの獣医師または城南家畜保健衛生所へ直ちに連絡してください！

熊本県城南家畜保健衛生所

電話 0966-22-3814

熊本県城南地区家畜自衛防疫促進協議会

電話 0966-28-3234